

会議議事録

会議名	第1回 教育課程編成委員会
開催日時	平成28年8月24日(水) 10:00~12:00
場所	本校舎2階 会議室
出席者	<p>① 企業等委員 川口輝裕 一般法人日本アパレル・ファッション産業協会 参事 田中克昌 株式会社TSI ホールディングス 管理本部人事部副部長 中村康太郎 株式会社日本アパレルシステムサイエンス 代表取締役社長 伊藤弘子 ZEROZEROESUESU INC. 代表取締役/デザイナー</p> <p>② 本校委員 布矢千春 本学院学院長 宮崎好明 本学院アパレル技術科科長 渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科長 曾根礼子 本学院教務課長</p> <p>③ 事務局 守屋知江 本学院教務課係長</p>
欠席者	なし
配布資料	ドレスメーカー学院「教育課程編成委員会規定」 ドレスメーカー学院「学校案内・入学試験要項」(平成29年度) ドレスメーカー学院「D. M. J. 会誌」 ドレスメーカー学院「授業計画」(平成28年度) ドレスメーカー学院「クラス時間割表」(平成28年度)
議題等	1. 出席者紹介 布矢院長より本学委員、企業等委員が紹介された。 2. 教育課程編成委員会の目的 布矢院長 布矢院長より配布資料の説明後、本学委員会設置、編成の経緯について説明した。 3. 高度アパレル専門科教育課程の現状について 渡邊高度アパレル専門科科長より資料「授業計画」に基づき、学科の教育運営と教育概要について説明された。 4. 質疑応答 高度アパレル専門科の教育課程について質疑応答と意見交換が行われた。 詳細は、別紙のとおり。 5. アパレル技術科教育課程の現状について 宮崎好明アパレル技術科科長より資料「授業計画」に基づき、学科の教育運営と教育概要について説明された。

	<p>6. 質疑応答</p> <p>アパレル技術科の教育課程について質疑応答と意見交換が行われた。</p> <p>詳細は、別紙のとおり。</p> <p>7. 次回日程について、 その他</p> <p>次回：11月4日（金）10：00～12：00 会場は本校舎2階会議室</p> <p>以上を確認して閉会した。</p>
--	--

以上

第1回 教育課程編成委員会の主な討議内容

○学校側より、本学委員会設置、編成の経緯について説明した。

- ・授業についてはカリキュラム委員会を実施して、カリキュラムを編成している。それをシラバスにまとめているので、各委員に見て頂きアドバイスをいただきたい。組織としては、院長の直下に編成し、教務が事務を担当する組織となっている。
- ・産学連携の授業の実施について付箋を貼り示している。今回は今までやっていることが、産学に相応しているか検討していただきたい。今後も PDCA サイクルで検討してレベルアップを図る予定である。カリキュラム名としては掲載されていないが、服飾造形等の授業の中で実施している産学連携の授業も補足説明する。

○高度アパレル専門科

資料「授業計画」に基づき、学科の教育運営と教育概要について学年ごとに説明した。

- ・高度アパレル専門科は4年制の課程。卒業時に高度専門士の称号が与えられる。定員15名。授業については、専門の科目の他に一般科目、教養科目を必修で入れている。就職率100%でデザイナーや総合職が多く、服飾系で就職している。
- ・服飾造形については、ドレメ式の原型を用いた授業や工業用パターンを用いる授業、アミコ式の立体裁断を実施している。検定試験にも挑戦する。
- ・特に企業と連携して実施している科目は、「アパレルデザイン・商品企画」、「インターンシップ」。
- ・「服飾造形Ⅱ（服飾造形・実習Ⅱ）」、「服飾造形Ⅳ（服飾造形総合演習）」の中にも産学連携を組み込んでいる。

○高度アパレル専門科の教育課程について質疑応答と意見交換が行われた。

1. I 委員

- ・服飾造形の学習の他に素材等を学ぶ科目もあり実質的な授業である。特にコンテストなど学外で挑戦する事も授業の中で取り入れているのは合理的で、リアリティもあり実践的である。MDからの目線やブランディングもできていることは良い。

2. K 委員

- ・服飾に関する必要な科目が網羅されており、特にIT技術を多く取り入れ、プレゼンテーションにも力を入れているのが特徴である。

3. K 委員

- ・それぞれの科目に到達目標を設けているが、到達の評価基準はあるのか。他校でもどう評価するのか

多くの時間を割いて議論をしている。また、評価者(教員)によってバラツキが生じるので、評価者のトレーニングも必要である。技術を修得することに集中するだけでなく、そこを明確にすることで実践的な教育がさらに生きてくる。

4. T 委員

- ・基礎力の修得からプレゼンテーションまで計画的に設計をしている。また小人数だからこのカリキュラムとなっていてそれが就職率に結びついていると思う。テクニカル的には完成しているカリキュラムだが、実社会で必要な集中力、人間力、コミュニケーション力をどう養っていくのかがこのカリキュラムでは見えない。授業をこなしていく中で身につけていくのだろうが、教員の力量が大きく影響してくる。

5. T 委員

- ・作品等が実際にマーケットに通用するのかを到達目標や評価基準に入れた方がよいのではないか。

6. I 委員

- ・個々に伸ばしていくのか、レベルに合わせるのか、育てる人材像を明確にすると良い。
 - 1, 2年はベーシックなことでの評価で、3, 4年はマーケットとしての捕らえ方を基準にしてはどうか。育てる人材像を明確にすることで、取組み足りないものはなにか等チェックする。

7. K 委員

- ・達成目標を明確にしたほうが良い。学校を訓練の場と考えると、それぞれのカリキュラムに目的があることを生徒にきちんと理解してもらう事が重要で、企業は教育者ではないのでどのような要件が良いのかの判断は難しいが、期待している事柄を最初に到達目標としてかかげておくことが必要。

8. N 委員

- ・インターンシップを強化して行ってはどうか。

○アパレル技術科

資料「授業計画」に基づき、学科の教育運営と教育概要について学年ごとに説明された。

- ・服飾造形については、平面構成、立体構成、工業パターンを学習し、パタンナーが実際に行っている作業をかなり授業に取り入れている。使うミシンも縫製工場で使用しているものを使っている。パターンについては、ハンド(手引き)とCADが同じように行える事を強化している。
- ・産学連携として実施している科目は、「インターンシップ」、「自由制作(リクチュール)」である。
- ・「平面構成・実習Ⅰ(産学協同マーケティングプロジェクト)」、「平面構成・実習Ⅱ(産学協同企画)」、「平面構成・実習Ⅱ(CADパターンメイキング)」でも産学連携を実施している。

○アパレル技術科の教育課程について質疑応答と意見交換が行われた。

9. N 委員

- ・即戦力を掲げての教育であるが、専門職であるパタンナーは、社会に出るとどうしても視野が狭くなっている。学生の時に視野を広げるような教育を是非していただきたい。

10. T 委員

- ・即戦力というのは企業側としてはこのまま行ってもらいたいが、技術力が高いといってもコミュニケーション力が必要である。デザイナーとの連携の中で頭の柔らかさを養い、時代に添ったデザイナー等の育成を視野にいれた教育を産学連携の授業の中でして欲しい。

11. K 委員

- ・フェイスブックの活用はどのようにしているのか？

○学校側

- ・フェイスブックの活用方法については、IT 業界の方に演習によるフェイスブックの立上げをしようしてもらい、仕事をする上でどう活用するのかという授業を実施している。今年については、e コマースの特別講義を行った。

12. K 委員

- ・品質表示表が12月から変わるにあたり、授業の中で必須にして欲しい。高校の家庭科の教員もまだ把握していない事もあるだろう。これは高度アパレル専門課程、アパレル技術科両科が必要である。

13. K 委員

- ・ファッションの創作について、そのデザインが何からインスピレーションを受けたものなのか、コピーなのか社会人になっても引き続き考えていかなければならない重要な問題である。知的財産権の問題でもあり、リスクもある。また、それをチェックしていくマニュアルを教えるべきではないか。ファッション・ローの観点からも授業で取り入れることを考えてはどうか。

14. I 委員

- ・授業の中で部分縫いの指導をしているが、その指導はとても必要である。インターンシップ等で学生を受け入れる際に、縫製の知識がないとそこから指導しなければならないので、身につけて来て欲しい点である。昨今、中国からの留学生も多いので、インターンシップで感じたことだが専門用語のフォローをしてあげたほうが良いと思う。

15. I 委員

- ・パタンナーとして実際仕事をするとなるとCADで行う。そのことを考えるとCADの授業は1年生からよいのではないか。

○学校側より、今回いただいたアドバイスをまとめ、専門的な事に関しては個別に問い合わせをさせていただき、改善できる事をまとめ上げ、11月に報告する旨の説明が行われた。

会議議事録

会議名	第2回 教育課程編成委員会
開催日時	平成28年11月4日(水) 10:00~12:00
場所	本校舎2階 会議室
出席者	<p>① 企業等委員 川口輝裕 一般法人日本アパレル・ファッション産業協会 参事 田中克昌 株式会社TSI ホールディングス 管理本部人事部副部長 中村康太郎 株式会社日本アパレルシステムサイエンス 代表取締役社長 伊藤弘子 ZEROZEROESUESU INC.代表取締役/デザイナー</p> <p>② 本校委員 布矢千春 本学院学院長 宮崎好明 本学院アパレル技術科科长 渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科长 曾根礼子 本学院教務課長</p> <p>③ 事務局 守屋知江 本学院教務課係長</p>
欠席者	なし
配布資料	ドレスメーカー学院「第1回 教育課程編成委員会の主な討議内容」 ドレスメーカー学院「授業評価アンケート(講義用)」用紙
議題等	1. 「職業実践専門課程」申請の報告 布矢院長より申請についての概略 渡邊高度アパレル専門科科长より報告 宮崎アパレル技術科科长より報告 2. 「第1回 教育課程編成委員会」で提案された事の改善案について 渡邊高度アパレル専門科科长より改善案について説明 質疑応答 宮崎アパレル技術科科长より改善案について説明 質疑応答 3. その他

以上

第2回 教育課程編成委員会の主な討議内容

1. 学校側より「職業実践専門課程」申請について報告

平成28年9月6日に高度アパレル専門科とアパレル技術科についての申請書を品川区に提出した。インターンシップに関する書類の追加があった。インターンシップを実際に行っているが、企業の都合で協定書を交わしていないところもあった。ホームページで公開している企業とのインターンシップの覚書をすべて提出するようにとホームページとの整合性を問われた。

国内インターンシップについては保険に入っているため事故などの保証はされるが、今回別の科で海外の展示会のインターンシップに行かされた。その場合学校の保健はカバーしていなく、個人負担になってしまった。国際化の時代になって将来的には海外でのインターンシップの対応も見据えていかなければならない。

「職業実践専門課程」の申請については、産学など授業で実行しているので、そのことを書類に落とし込む作業となった。内容はクリアしていると思っているが、どういった基準で審議されるのか見当がつかない。また、万が一申請が認められなかった場合でも、どこをどう改善していくのかをしっかりと協議していくことが大切だと思っている。

2. 「第1回教育課程編成委員会」で提案された事の改善案について

■高度アパレル専門科の改善案について

1. I 委員

服飾造形の学習の他に素材等を学ぶ科目もあり実質的な授業である。特にコンテストや課外で実施する事が授業の中で行えるのは合理的でリアリティもあり実践的である。MDからの目線やブランディングもできていることは良い。

○学校側

高度アパレル専門科の卒業制作は、以前はブランディングまで落とし込んでいなかった。現在は外部講師を入れてブランディングをした上で卒業制作に当たっている。

2. K 委員

服飾に関する必要な科目が網羅されており、特にIT技術を多く取り入れ、プレゼンテーションにも力を入れているのが特徴である。

○学校側

プレゼンテーションの授業については来年度から外部講師に担当してもらい、もう少し強化したプログラムにして充実を図る予定でいる。

3. K委員

それぞれの科目に到達目標を設けているが、到達の評価基準はあるのか。他校でもどう評価するのか多くの時間を割いて議論をしている。また、評価者(教員)によってバラツキが生じるので、評価者のトレーニングも必要である。技術を修得することに集中するだけでなく、そこを明確にすることで実践的な教育がさらに生きてくる。

○学校側

必ず1年生から4年生まで、4月のオリエンテーション期間に科目の目標・到達点を説明して、平常授業に入っている。最後には教員に対しての授業アンケートを前期・後期に必ず実施している。評価者のトレーニングについては、自己点検や主任会議で議論していくが、現時点ではかなり難しいことだと思っている。しかし、避けては通れないので、レベルアップ出来ることをアドバイスしていただきたい。

●K委員

カリキュラムが実践されて、成果があがっているか、自己点検の中で、指標をかかげて行う必要がある。それぞれの先生の基準は同じ基準なのか。言葉の確認ではなく、数値化するか、全員が同じチェックリストを持つとか。そこをしっかりとやっていくとよい。実施された後の自己点検で、何をもって判断しているのかのエビデンスを残すことをして欲しい。実践の途中でチェックをしながら質を保ち、そのうえで自己点検を行い、ホームページに公開していくと、高校の先生にもよくわかるのではないかと。今後は第三者評価が重要となってくる。

4. T委員

基礎力の修得からプレゼンテーションまで計画的に設計をしている。また小人数だからこそそのカリキュラムとなっていてそれが就職率に結びついていると思う。テクニカル的には完成しているカリキュラムだが、実社会で必要な集中力、人間力、コミュニケーション力をどう養っていくのかがこのカリキュラムでは見えない。授業をこなしていく中で身につけていくのだろうが、教員の力量が大きく影響してくる。

○学校側

外部講師をいれて強化し、プレゼンテーションの授業内容を見直して院長自身がカリキュラムをチェックしている。学年が上がるごとに段々上手くなっていく。4年生のプレゼンになるとPDCAサイクルまで教えているので、しっかりしたものになっている。2年生はもう少し強化していかなければならないと感じている。来年度からは、到達目標を明確にしてカリキュラムに落とし込んで4年間の流れを作っていくと思う。学生は非常におとなしいが、きちんと自分の言いたいことが言えるように育てていく。また、ファッションに関するプレゼンテーションを教えられる講師が少ないという問題がある。つまり、IT技術とアパレル企画内容の両方を教えられる講師がいないのが現状である。

5. T委員

作品等が実際にマーケットに通用するのかを到達目標や評価基準に入れた方がよいのではないか。

○学校側

産学連携の授業で一昨年立ち上げた杉野エプロンと取り組んでいる。去年はTデパートで販売して販売の難しさを経験して有意義だった。今年は特許申請する手前までこぎつけた。企業にも売り込みをかけている。3年目の取り組みでやっとマーケットに通用する授業となった。年によってばらつきがあり、企業が大量生産するとは限らない。毎年商品化して売れるところに行くわけではない。Tデパートでの販売はクレジットの事や接客、洗濯表示、サンプル、営業までTデパートの基準はクリアしたが、実際売り上げは少額である。まだ、立ち上がりから3年目なので、どこを到達目標とするのかが難しいが、到達目標を設けることを前向きに考えていきたい。

6. I委員

個々に伸ばしていくのか、レベルに合わせるのか、育てる人材像を明確にすると良い。

○学校側

1, 2年はベーシックなことでの評価で、3, 4年はマーケットとしての捕らえ方を基準にしてはどうか。育てる人材像を明確にすることで、取組みが足りないものはなにか等をチェックする。

7. K委員

達成目標を明確にしたほうが良い。学校を訓練の場と考え、それぞれのカリキュラムに目的があることを生徒にきちんと理解してもらう事が重要で、企業は教育者ではないのでどのような要件が良いのかの判断は難しいが、期待している事柄を最初に到達目標としてかかげておくことが必要。

○学校側

この人材育成像と達成目標については、大切だと思いましたので、今年の自己点検で、さらに取り組んで参ります。

8. N委員

インターンシップを強化して行ってはどうか。

○学校側

インターンシップは2年でも3年でもインターンシップに行けるようなカリキュラムになっている。現在は1社行けば良いとなっているが、2社行っても良いかもしれない。様々なファッション企業を経験することによって見識が広がれば良いと思っている。

【その他の質問】

●N 委員

杉野エプロンの特許権は学校としての特許申請ですか？お金が絡む話なので専門家の方に相談して想定した方がもめる要因にならないのではないかと。どういう特許か。

○学校側

現在は学校が特許事務所の先生にお願いしており、特許として通るかどうかりサーチ中である。学校としてどう扱ったらいいのか慎重に判断して行きたい。学園祭でテスト販売しようとしたが、先に販売すると特許が取れなくなるので中止した。

杉野エプロンは、四角い布に切り込みを入れて残布が出ない1枚の布のカッティングである。その上デザイン性がある。エプロンだけでなくいろいろなアイテムに応用ができるという特許である。

●I 委員

学生が自ら商品企画を経験してその難しさを知るのは良いことだと思う。続けていけば、新しいアイデアが出て授業内容がレベルアップすると思う。

○学校側

今年度、羽田空港にある店舗ともトラベル商品の企画製作に取り組んだ。しかし、実際にプレゼンをしたも、ポーチは値段が合わなかったり、すでにやっているアイデアだったり、特許権に引っかかり、商品化にはならず、学生にとってはハードルの高い分野だと感じた。学校側も継続して取り組み、ノウハウを蓄積してかなければならないと思っている。

■アパレル技術科の改善案についてについて

9. N委員

即戦力を掲げての教育であるが、専門職であるパタンナーは、社会に出るとどうしても視野が狭くなっている。学生の時に視野を広げるような教育を是非していただきたい。

○学校側

アパレル商品企画という授業の中で実施している。外部講師の方をお願いして、商品企画の一通りの工程を学習するという授業に年間を通して組んでおり、視野を広げる教育になっていると思う。

10. T委員

即戦力というのは企業側としてはこのまま行ってもらいたいが、技術力が高いといってもコミュニケーション力が必要である。デザイナーとの連携の中で頭の柔らかさを養い、時代に添ったデザイナー等の育成を視野にいれた教育を産学連携の授業の中でして欲しい。

○学校側

3年次に、デザイン画をお互いに交換して他人のデザイン画のパターンを製作するという授業を行って

いる。企業の中でのデザイナーとパタンナーが常に会話しているという現場の仕事のやり方を授業の中に取り入れている。企画した人間の思いを作る者がいかに受け入れて形にしていくか、それを学生のうちに学ばせようという趣旨である。そういう意味ではコミュニケーション力とか相手の気持ちが分かる能力をこの授業で養えると思って実行している。企業に入って戸惑わない様に教育している。

アパレル技術科はパタンナーになるのだが、視野を広げるために今計画している産学連携は2年生修了制作で「きものリメイク」に取り組む予定である。着物をT社に提供してもらい学びながら、B社（着物のリメイクではとても有名な企業）に講師をお願いして和服をリメイクする授業を行う。すでに終わっているエコの産学連携では、リクチュールデザイナーのY氏が特別講義を行い、リメイク企業のE社からプロのデニムの解体方法を実習して、その材料で新しい作品を完成させるというエコを学んでいる。このように視野を広げる教育を充実させている。

11. K委員

フェイスブックの活用はどのようにしているのか？

○学校側

IT系の方に講義していただき、フェイスブックが企業や個人で実際どういう風に利用されているかという特別講義を行っている。現実には若い人のフェイスブック離れが顕著で、インスタグラムが多いが、フェイスブックは大人の社会の中では重要なツールとなっている。それに変わるものが出てくるまでは、履歴書をどう載せるかなどの活用法はやって行こうと思う。ビジネス科ではやっているが、リサーチの時にピタレストとかSNSを使ってどう取り入れるかなど、ITについてはもう少し充実したカリキュラムを組んでいく予定。ビジネス科はIT系の授業が進んでいるので、参考にしながら取り組む予定。

12. K委員

品質表示表が12月から変わるにあたり、授業の中で必須にして欲しい。高校の家庭科の教員もまだ把握していない事もあるだろう。これは高度アパレル専門課、アパレル技術科両科に必要である。

○学校側

委員からのご紹介で、R社による特別講義の実施が決まった。

13. K委員

ファッションの創作について、そのデザインがどこからインスピレーションを受けたものなのか、コピーなのか社会人になっても引き続き考えていかなければならない重要な問題である。知的財産権の問題でもあり、リスクもある。また、それをチェックしていくマニュアルを教えるべきではないか。ファッション・ローの観点からも考えてはどうか？

○学校側

高校生はコピーをするといった観念が低下して、加工さえすれば自分の作品という感覚が非常に強いと聞いた。高度アパレル専門科3年生の商品企画の授業で、コピーした作品が実際あった。コピーに対する罪の認識が弱いのではないかと感じる。取り組む学年を考えながら具体的に授業に取り入れて、毎年やっていけたらと思っている。委員からのご紹介で、特別講義の実施が決まった。

14. I 委員

授業の中で部分縫いの指導をしているが、その指導はとても必要である。インターンシップ等で学生を受け入れる際に、縫製の知識がないとそこから指導しなければならないので、身につけて来て欲しい点である。昨今、中国からの留学生も多いので、インターンシップで感じたことだが専門用語のフォローをしてあげたほうが良いと思う。

○学校側

1年生の時に部分縫いは、服種のパーツの部分を網羅しており、かなりの量を実施している。言葉の問題は、専門用語も部分縫いの時に教え、パターン作りのときも専門用語をかなり教えている。仕様書を必ず書かせ、1年生の内に縫製の基礎の部分と専門用語の基礎の部分を1年間かけてきちんとやっている。2年生になると学生の理解度は高まり日常会話でも使用しているので、アパレル技術科では問題ないと思っている。

15. I 委員

パタンナーとして実際仕事をするととなるとCADで行う。そのことを考えるとCADの授業は1年生からでよいのではないか。

○学校側

1年からCADを教えている。アパレル技術科は、手書きとCADと同じレベルでパターンメイキングができることを目標としている。それと同時に3年生では、産学連携としてJASS（パターン製作企業）のCADの講義を3回行い、その後に1週間～10日間のインターンシップを行っている。そこで実際に企業がしているCADのやり方を学ぶ。生徒たちは、現場で早くきれいに出来る企業のCADのやり方を教えてもらっている。CADについてはかなり高いレベルに行っている。

以上、委員の方々からいただいたご提案や質問について回答しご報告させていただきました。

3.その他

■講評

●I委員

物を作って売るというリアリティが感じられる。学校の特徴がよく出ている。作った人が販売も経験するのは重要なので、自分たちが製作した商品を現場で売る体験を毎年経験できると良い。

●K委員

評価というところに課題をもって整理してお伝えすると、先月第三者の評価者の人間が集められて研修会があった。そこで文部科学省の専修学校教育振興室のS氏が話していたことは、専修学校の職業実践専門課程については、「学外からの客観的評価、社会の期待に応える。そのための情報公開」をキーワードと言っていた。「どういう人材を育成するのか。またその人が社会で役立っているのか。知識と能力とコンピテンシーだ」とも言っていた。例えば、ある会社でAという職種で実績を上げているロールモデルの方の行動要件、その人がどういう能力を発揮しているのかという分析があって、そのコンピテンシーの中の基礎力、技術力、能力を専門学校がチャッチアップして学びに生かす。その上で企業のやり方を重ねていく。それを実施した時に、社会に役立つ人材を育成したといえる。職業実践専門課程については、企業と密接な関係であって欲しい。御校では特徴のある2つの科、さらには特徴のある教科、カリキュラム、それがどのような人材、能力を育成しようとしているのか。今後は、「卒業生が企業の中に入って活躍しているのかを必ずリサーチして公開してください」という方向が望まれている。

医学系の学校では医師としての適正や、患者に信頼されているか、またITの学校では、卒業後の定着率、雑誌での評価を卒業生でみている。さらに、卒業生が活躍しているのか、教えた事が役に立っているのか、ということでも企業とも密接であってほしい。

カリキュラムの精度を上げていく上でも企業とも密接に連携をして、PDCAサイクルで実施していくことが求められている。

●T委員

すでにいろいろ実施していて十分な回答をいただいたと思っている。実践的な商品企画では到達目標の設定が難しいことはわかる。結果として売れたか売れないかでは判断できないが、マーケットに通用するために何が重要かという視点は重要。バイヤーと消費者の目は違うだろう。コストから割り出す店頭価格。量産ができるのか。マーケットにおいては他の商品と比べてどうなのか。商品の出来栄もあつての評価ではあると思うが、チェック項目を設けて挑戦し続けて欲しいと思う。

企業が求める人材について知識・能力は重要だが人材要件、人間力、コミュニケーション力はいろいろな要件がある。弊社の中の人材要件の資料もあるので教材として使っていただけるのなら提供できる。

●I委員

ただ服を作っているだけだと気づかない事なので、コスト計算はとても良い勉強になると思う。一点ものを作るデザイナーになりたい生徒もいてもいいので、始めから安いものを作ってみなさいという

のではなく、作った後から計算するのも勉強になる。

○学校側

工程分析やコスト計算の授業は行っている。3年生は商品を作った後からコスト計算を企業の方に指導を受けている。作ってから計算すると採算の取れない値段になる。学生は積み上げていくと工程数が多く、値段が上がり、誰も買わない価格になる。全部企画を終わった段階で気づく。4年生になると1度経験しているのでレベルアップはしている。コスト計算は知らないで卒業するより知って卒業するのがよいと思っている。

●N委員

売り方を含めてIT系と技術系を両方兼ね備えている人材を育成するのは難しい。例えばIT系の方はネットで自ら売る。これから求められるのは服作りだけでなくいろいろ個人としてやっていかなければならない事がある。自ら仕掛けられることによって勉強になるのではないか。ITと技術を兼ね備えている人材は少ないと思う。それが重要なことはわかっているし、是非それを仕掛けられたら私も関わっていきたい。

○学校側

eコマースでは、杉野エプロンでも実施を考えていたが特許の問題があり、できない状態である。教員は、コンピテンシーやロールモデルを決めて人材像を絞り込んでしまう事に怖さを感じてしまう。いろいろな生徒と接すると、あの子もこの子もと育成人材像がぼやけてしまう。ロールモデルに近い生徒に育てていくという強い意志を持っていかないといけない。どうしても多くの生徒に来てもらいたいために、知らず知らずのうちに育成人材像がぼやけてしまう。この委員会で多くを学ばせていただいたので、このことを自己点検やカリキュラム会議、学校関係者会議で生かして行けたらと思っている。

産学連携で、店舗の商品写真を撮り、お店のイメージマップを作るマーケティングリサーチの授業がある。お店の写真を撮る前に了解を取るように言っているのだが、なかなか了解が得られず断られてしまう。学生は隠れてやるかもしれないが、その事を授業としていいのかとの思いもあり、われわれ学校側としての課題が残った。プロはプロとして仕事をしているので、当たり前前に隠し撮りもする。産学連携でプロの講師に依頼した場合、指導者が教員ではないので、学校側が指導内容に細かくチェックを入れないと問題が起きてしまう。今回は水際で課題の見直しをし、問題にはならなかったが、産学連携は気をつけなければならないこともある。